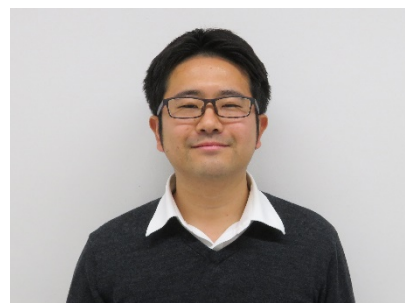


事例紹介
学校編

主権者教育につながる募金・寄付活動とは !

東京都 杉並区立杉並和泉学園

めぐる としふみ
教諭 目黒 俊史 氏



地域社会の中で長年育まれた社会貢献活動

本校は、元々の杉並区立和泉小学校、新泉小学校、和泉中学校が一緒になり、平成 27 年度に杉並区初の小中一貫校としてスタートしました。

本校の教育目標には「進んで学ぶ人、思いやりのある人、たくましく生きる人、社会に役立つ人」の 4 つがありまして、社会貢献活動は、4 番目の目標とつながっています。

本校では、平成 23 年度より公益社団法人日本フィランソロピー協会の協力で社会貢献活動を始めました。初年度は有志の活動でしたが、平成 24 年度から総合的な学習の時間の取り組みとして、中学 3 年生（9 年生）の学年全体で募金・寄付活動を実施しています。

長年の取り組みで、また 8 年生時に地域の商店街への職場体験なども行なっていますので、比較的地域の理解がある中で活動を行なうことができます。

自己肯定感の高まりの先にある、 主権者となる第一歩

平成 30 年度の目標としては、募金・寄付を通じて、社会について考え、主体的に行動し、多く

の人と関わることによって自己肯定感を高め、自ら進んで社会のために役立とうとする資質能力を育てよう、ということを目指しました。

そしてその先にあるのは、主権者となる第一歩を踏み出してほしい、という思いです。18 歳、つまり中学校を卒業して 3 年後には選挙権を持ち、社会に責任を持って行動していく主権者になります。自分たちの力で社会をより良くすることができる、社会のために取り組むことが自分の成長につながるという実感を持ってほしいと考えていました。

自分たちの社会への関心を言葉に表し、 多くの中から一つにまとめていく

授業は 9 月から約 2 カ月間、11 時間単位で行ないました。

まず、夏休み前に生徒たちに、社会課題への関心や募金活動をすることについてのアンケートを取りました。前者については、サポートしてくれた日本フィランソロピー協会の職員と、最初からテーマを絞って提示するのか、自由に子どもたちから出た意見を集約する方が良いのかを議論し、後者のボトムアップの方向を採りました。

当時九州豪雨の被害も出ており、子どもたちは私たちが考える以上にさまざまなテーマを出してくれました。それを元に5つのテーマに絞り、生徒たちの話し合いを経て一つにしました。

生徒たちの結論としては、今困っている子どもたちを救うことは未来を救うこと、自分たちと同じ世代を助けることが大事だ、ということになり、インドの貧しい家庭の子どもが売られないよう支援する「特定非営利活動法人かものはしプロジェクト」への支援が決まりました。

思いを他者に伝えるための工夫

課題と寄付先が決まると、募金の目標額を設定し、地域の人たちに呼びかけるためのキャッチフレーズ作成やロールプレイなど、募金活動の準備をしました。寄付先団体とも連絡して象徴的な写真のデータをもらい、商店街や駅で配布するポスターを手作りで作成しました。

地域の大人との関りの中から

募金活動は、商店街を一軒ずつ回る方法、駅前呼びかける方法の2種類行ないました。実際に活動した生徒たちは、地域の方の優しい対応や期待を感じる一方で、緊張して練習したように話せなかったり、思わぬ質問に詰まったりするなど、教室の中では味わえない緊張感を体験することができました。

また、最初のアンケートでは募金活動に否定的だった生徒たちや、普段の学校生活の中ではあまり積極的な態度が見られない生徒が、活動を進める中で自分事として捉え、積極的になっていく変化を見ることができました。

活動日だけでなく、後日地域の方から寄付が届けられるなどして、最終的に募金金額は22万円

を超えました。目標金額は25万円でしたが、それでもこれだけの額が集められたことは、生徒たちの大きな自信になったのではないかと思います。

社会の授業には「社会貢献活動」という項目がありますが、具体的な実践を通して教科学習の内容を理解するということにもつながりました。

一方、9年生が行なう活動として、時間をどのように有効活用するかが、まだ課題の一つとなっています。



事例発表～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

2018年3月25日東京セミナー

東京都 杉並区立杉並和泉学園 中学部

「社会貢献活動」

東京都杉並区和泉 2-17-14

平成 29 年度学級数：8 学級

平成 29 年度生徒数：185 人



「総合的な学習」の一環として、中学校 3 年生（9 年生）が学年で取り組む募金・寄付を通じた社会貢献活動。ディスカッションを通して取り組む課題や寄付先団体、募金の方法などを決め、商店街の店舗を訪問する個別募金や駅頭での募金活動を行なう。贈呈式は、小学部も交えた全校生徒の集会で行ない、学校内に活動を共有する。

1 教育的な意義／目標

「募金・寄付」を通して、社会について考え、主体的に行動し、多くの人とかわるることによって、自己肯定感を高め、自ら進んで社会のために役立とうとする資質・能力を育てる。

2 実施時期

9 月～10 月（平成 29 年度）

3 教育課程／教科との関連

総合的な学習の時間

4 指導体制

クラス担任教諭

5

活動の流れ(平成 29 年度)

ステップ1 社会について考える

夏休み前に事前アンケートを実施

- 1) インストラクションとマインドセット(前年の映像上映)、ディスカッション①(課題選定)
- 2) ディスカッション②(課題決定)

ステップ2 主体的に行動する

- 3) ディスカッション③(寄付先決定/目標金額決定)
- 4) ディスカッション④(募金活動のプラン/キャッチフレーズ)
- 5) ディスカッション⑤(募金活動の工夫/自分自身の目標)
- 6) ツール作成とロールプレイ(チラシ作り/募金活動の練習)

ステップ3 多くの人とかかわる

- 7) 商店街への募金の依頼および校内での広報活動。1週間にわたり登校時間に校内で募金活動
- 8) 校内募金の振り返りと、それを踏まえた練習
- 9) 10) 募金活動
- 11) 活動の振り返り(全校朝会での報告・贈呈式・お礼状配布)

6

実績

年度	テーマ	寄付先団体	寄付金額
平成 23 年度	東日本大震災で被災した子どもの学習支援	特定非営利活動法人アスイク	約 12 万円
平成 24 年度	アフリカの飢餓を解消する	特定非営利活動法人 ハンガー・フリー・ワールド	約 14 万円
平成 25 年度	アフリカの子どもの学習支援	特定非営利活動法人難民を助ける会	約 22 万円
平成 26 年度	誰もが笑顔の街	特定非営利活動法人フローレンス	約 19 万円
平成 27 年度	ネパール地震被災地の子どもの支援	特定非営利活動法人 ADRA JAPAN 特定非営利活動法人 アジア・コミュニティ・センター21	約 20 万円
平成 28 年度	一人暮らしのお年寄りが地域で安心して暮らせるための支援	特定非営利活動法人 新しいホームをつくる会 社会福祉法人サンフレンズ	約 15 万円
平成 29 年度	アジアの貧困状態にある子どもの支援	特定非営利活動法人かものはしプロジェクト	約 22 万円

7

活動費用について

学内の備品で対応。

8

活動の連携先

募金活動：永福町駅北口商和会、和泉仲通り商栄会、京王線「明大前駅」・「永福町駅」

寄付先団体：特定非営利活動法人かものはしプロジェクト(平成 29 年度)

ファシリテーター：公益社団法人日本フィランソロピー協会

熊本地震で被害を受けた南阿蘇鉄道復活に向けて 中学生ができること

熊本県 高森町立高森中学校
教諭 ふじわら きせい 藤原 棋聖 氏



活動のきっかけ

～チャリティー・リレーマラソン

本校は平成 28 年度より、公益社団法人日本フィランソロピー協会が主催する「東北・熊本復興応援チャリティー・リレーマラソン」に参加しています。チャリティー・リレーマラソンは、東北・熊本・東京の中学生が、被災地の現状と課題を共有し、募金活動やボランティア活動を行ない、解決に向け共に行動するという趣旨で行なわれています。

この取り組みを通して、生徒たちが地域の課題と考えたのが南阿蘇鉄道の全線復旧でした。「南阿蘇鉄道が利用できないことで、身近な人たちの生活に支障が出てきている」「南阿蘇鉄道は、私たちにとって必要な交通機関である」という意見が出ました。

全線復旧には 70 億円もの修繕費用がかかるとされていますが、中学生も募金活動を行なうとなんとか力になりたいと考えました。

募金活動の参加機会を増やし裾野を広げる

募金活動の目的が「南阿蘇鉄道の全線復旧」に決まり、生徒会執行部を中心に具体的な活動を開始しました。

南阿蘇鉄道に相談したところ、募金をしてくれた方にお礼の缶バッジを差し上げる、というボランティアグループの取り組みを紹介していただきました。地域の人と交流でき、いつまでも残しておけると考え、自分たちも行なうことにしました。初年度は缶バッジを 500 個作成し地域イベント等で週末に募金活動を複数回行ない、78 万円を寄付することができました。

今年度、生徒会執行部の生徒たちは「全校生徒で取り組むような形にしたい」と考えるようになりました。そこで、缶バッジのデザインを全校生徒、教職員から公募することにしました。また、町内会の商業施設に募金箱と缶バッジを置かせてもらえないだろうかということも考えました。そして、生徒全員が募金活動に参加してほしいという希望が出ました。当日の活動だけでなくチラシ作りなど準備も含めて多くの生徒が参加でき

るようになりました。

募金活動は2学期から、地元の商業施設や、高森町の議会、文化祭などの機会に行ないました。地域のイベントでは募金活動と同時にオリジナル缶バッジを作るブースも出しました。保護者、高森町の町長や議長、衆議院議員の代議士の方々に、「高森中学校では南阿蘇鉄道復旧のための募金活動を行なっています」ということを伝えることができました。

また、高森町の地元専門チャンネル「たかもりポイントチャンネル」でも取り組みを紹介いただき、町内の方々から、放送の後には励ましの言葉をいただきました。

こうして、昨年より募金活動に参加する生徒が増え、募金に対する意識も高まりました。また、高森町民の方々に募金活動について知っていただくことができました。今回は缶バッジを1,000個作り、材料費を差し引いて、57万円ほどを寄付する予定です（※）。

一方、募金活動の際に、挨拶の声が小さいとか、お礼の言葉が小さいということがあったので、お金をいただくことを踏まえ、そうした声や挨拶はしっかりしていかなければいけないと反省しました。

南阿蘇鉄道の全線復旧に向けて

今後も活動を継続し、また、学校間での連携を深めていきたいと考えています。近隣の中学校の生徒会や、一緒にチャリティー・リレーマラソンに参加した高森東学園や御船町立御船中学校、被害が大きかった南阿蘇村の南阿蘇中学校と一緒に、合同で募金活動をしたいと考えているところです。

南阿蘇鉄道復旧に向けて来年度の復興に関わ

る予算が20億円計上されています。新聞に載っていましたが、新制度が適用され、国が費用の97.5パーセントを負担するという事です。

修繕費70億円のほとんどを出してもらうことになるのですが、残り2.5パーセント分の1億7,000万円は南阿蘇村と高森町が負担しなければなりません。全線復旧に向けて5年以上かかりますので、その時のことを考えて中学生の活動を継続していきたいと考えています。

また、中学生の活動の重要性は資金あつめだけではないと考えています。「中学生が活動をしている」ことで、地元の熱意を発信することができます。国に対しても、高森町、南阿蘇村含めた県民が南阿蘇鉄道を必要としていることを理解してもらうきっかけになったのではないかと思います。

※その後の活動により、平成29年度の最終的な寄付額は636,360円になった（事務局追記）。



事例発表～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

2018年2月10日福岡セミナー

熊本県 高森町立高森中学校

「熊本地震で被災した 南阿蘇鉄道復旧のための募金・寄付活動」

熊本県阿蘇郡高森町高森 1955

平成 29 年度学級数：8 学級

平成 29 年度生徒数：133 人



熊本地震で被災した「南阿蘇鉄道」の全線復旧を願い、生徒会を中心に、募金・寄付活動を実施。地域の特産品などをモチーフにしたオリジナル缶バッジを作成し、地域イベント等で募金に協力した人にプレゼントする募金活動を実施。

1

教育的な意義／目標

- ・熊本地震で被災した、愛するふるさと（熊本）のために、生徒自身で何ができるのかを自ら考え行動し、実践していこうとする。
- ・地域社会との関わりを持つことの大切さを知り、目を向けることができる生徒の育成（地元を大切に、貢献しようとする心の醸成）。

2

実施時期

毎年 10 月～翌 3 月

3 教育課程／教科との関連

特別活動

4 指導体制

教務主任および生徒会担当教諭

5 活動の流れ

10月 全校生徒／教職員を対象に、缶バッチのデザイン公募
デザインの決定および缶バッチの作成
募金活動の開始

3月 南阿蘇鉄道への寄付

6 実績

	募金総額	缶バッチ作成数
平成 28 年度	780,000 円	500 枚
平成 29 年度	636,360 円	1,000 枚

7 活動費用について

チャリティー・リレーマラソン事業からの寄付配分金 49 万円から缶バッチ作成費用を捻出。
(配分金…企業や東京の中学校からの寄付、東京での合同募金で集まった金額を被災地の中学校で均等に分けたもの)

8 活動の連携先

募金活動：ボランティアグループ me&you

寄付先団体：南阿蘇鉄道株式会社

一人暮らしのお年寄りと交わす福招き年賀状



福岡県 福津市立福間中学校
しらき てるひさ
校長 白木 照久 氏

学校、家庭、地域が協働して子どもを育てる

福間中学校は平成 23 年度、コミュニティ・スクールとなりました。学校、家庭、地域が協働して子どもを育てようと、地域の方々に学校に来ていただいて一緒に学ぶという特色ある教育活動を行なっています。

マスコットキャラクターは、コミュニティ・スクールのスタートを記念して、生徒から公募した作品で「福まねき」という名前です。「福間」と「招き猫」を掛け合わせています。頭にハチマキ、手には本を持っていて「文武両道で頑張る」という思いが込められています。

活動の教育的意義

～地域への恩返しとしての活動

「地域貢献活動」は、お世話になっている地域の方々への感謝の気持ちから行なっています。その一つ「福招き年賀状大作戦」は、募金で集めたお金で年賀状を購入し、自分たちで年賀状を書いて地域の一人暮らしのお年寄りに送る活動です。

毎年 12 月、生徒会を中心に 3 日間限定で募金活動を行ないます。のぼりや募金箱も生徒が作ります。今では二つの小学校にも募金をお願いし、

6 年生の児童にも年賀状を書いてもらっています。年賀状には、必ず生徒自身の紹介を書くようにしています。今年は 1,600 枚の年賀状を書きました。書き終えた年賀状は市役所を通じて郵送します。

この活動には教育的な意義があります。それは、今まで直接的にあるいは間接的にお世話になった方々に感謝の気持ちを表すということと、地域の方々との絆づくりです。そして、募金寄付の意義についても学ぶようにしています。事前学習で子どもたちの気持ちを高めた上で活動し、年賀状も丁寧に作成します。

取り組みを始めたきっかけは、平成 24 年 11 月の第 1 回コミュニティ・スクール研究発表会でした。『認知症の高齢者とのより良い関わり方について考えよう』という授業があり、生徒たちは市内に一人暮らしのお年寄りがたくさんいることを知り、自分たちにできることを考えました。そして生徒会が中心になって具体的な活動を企画していきました。「一人暮らしのお年寄りは、はがき一枚でも嬉しい」という話も聞き、年末も近かったので「年賀状を出そう」ということになりました。ただ年賀状は、みんなの気持ちを届け

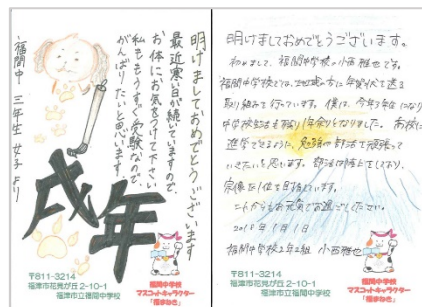
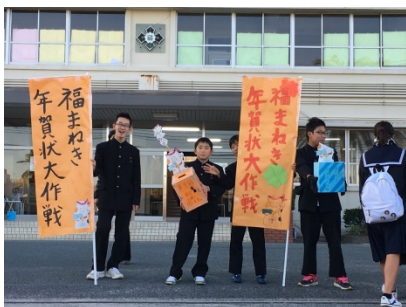
福岡県 福津市立福間中学校

「福招き年賀状大作戦」

福岡県福津市花見ヶ丘 2-10-1

平成 29 年度学級数：19 学級

平成 29 年度生徒数：672 人



福間中学校のマスコットキャラクター「福招き」が印刷された年賀状に生徒が手書きでメッセージや絵を書き、一人暮らしのお年寄りに送る活動。

1

教育的な意義／目標

- ・ 地域の人が支えてくれていることに感謝する気持ちを持つことができる
- ・ ボランティア精神や活動の大切さを理解し行動することができる
- ・ 世代の異なる地域住民とのつながりを実感することができる

2

実施時期

毎年 10 月～12 月

3

教育課程／教科との関連

特別活動、総合的な学習の時間

4

指導体制

生徒会担当教諭およびクラス担任教諭

5 活動の流れ

12 月 事前学習、準備

生徒を中心に募金活動（校門前、小学校）

生徒全員で年賀状作成（学活、総合等、授業時間内で作成）

完成した年賀状を福津市役所に届け、高齢者サービス課を通して送付

6 実績

	募金総額	年賀状の枚数
平成 24 年度	9,696 円	200 枚
平成 25 年度	26,277 円	615 枚
平成 26 年度	12,884 円	630 枚
平成 27 年度	73,106 円	1,000 枚
平成 28 年度	83,873 円	1,500 枚
平成 29 年度	98,013 円	1,600 枚

7 活動費用について

年賀状購入費用は生徒による募金活動により調達

8 活動の連携先

■福津市役所

中学校区内の一人暮らしの高齢者（65 歳以上）への年賀状送付

■福間南小学校、福間小学校

募金活動、年賀状作成の協力

部活動で取り組む PDCA サイクル ～社会貢献活動を発展させるために～



東京学芸大学附属国際中等教育学校

ふじき まさし
教諭 藤木 正史 氏

生徒たちが企画を創り運営する活動 ～生徒たちが本質に気づくために～

今日は私が顧問をしている「ボランティア部」が行なっているプロジェクトやストーリー、私自身が大事だと考えていること、そしてさまざまな団体と「連携すること」の意味もお話できればと思います。

実は、ボランティア部は明日から2泊3日で長野県上田市にスタディーツアーに行くことになっています。「jimoto プロジェクト」という取り組みの一環で、NPO 訪問や街並み散策などを通し、地域の課題を知り、ソリューションを考えるツアーです。

通常の教育課程に参加することが難しい人々を支援する団体や、ソーラーパネルを展開してエネルギー問題に取り組む団体を訪問したり、江戸時代の街並みが残るエリアを散策したり、真田地域をめぐる過疎などの課題の現状を学び、それらを踏まえて地元の人々と「真田のまちづくり」について語り合うフューチャーセッションも行ないます。最後は、上田高校と交流し、離れた地域の中高生が地域に対して何が出来るかを話し合う場

を持つプログラムになっています。

このスタディーツアーの企画運営は、中学3年の2人を中心に生徒がすべて自分たちで行なっています。企画担当は、すべての活動やワークショップについての提案、現地との調整を行ないます。運営担当は、旅行会社との折衝、保護者への案内、訪問先の時間調整、バスの停車場所等、細かい所まで設定します。

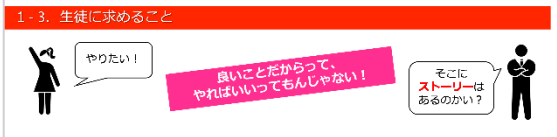
この間、生徒はいくつものNPOや企業とメールで頻りにやり取りを行なっています。私はCCに入っていて、やり取りを全部見えています。何か問題があった時にはフォロー・助言するようにしています。

生徒はいろいろなことを「やりたい」と言いますが、私は「良いことだからと言って、やれば良いという訳ではない」と返答しています。私が問うのは「そこにストーリーがあるのか」ということです。思いを実現するためには、さまざまな準備が必要です。

スタディーツアーの実現に向けて、事前準備、現地との折衝、保護者への案内、当日の運営、事後の振り返り、会計報告、参加費の決定と徴収など、

さまざまな担当や仕事がありますが、全部自分たちでやりなさい、と伝えました。結構大変そうですが、こうすることで生徒は本質に気づけるのだと思います。

1-3. 生徒に求めること



やりたい!

良いことだからって、やればいってちんじやない!

そこにストーリーはあるのか?

- 0 ミーティングをすすめる**
アジェンダの作成、資料の用意、ファシリテーション、会議の可視化、etc.
- 1 企画書を作成する**
企画趣旨、実施スケジュール、予算案、必要備品のリストアップ、etc.
- 2 渉外・申請をする**
イベントなどの場合：実施場所の調整・確保、出演・登壇依頼、旅行会社との打ち合わせ、etc.
※募金活動の場合：学校提出書類作成・申請 → 所轄警察署提出書類の作成・申請
- 3 事前準備・広報をする**
スタッフの割り振り、ロゴ作成、チラシ・ポスター作成、参加フォーム作成、参加受付、受付表作成、領収書作成、出演・登壇者との打ち合わせ、プレスリリース、etc.
- 4 当日運営する**
最終打ち合わせ、司会・記録・ファシリテーション・受付・時間管理、SNSで発信、etc.
- 5 ふりかえる・報告する・事後処理をする**
収支の概算と出入金管理表への記帳、SNS等で実施の報告、スタッフアンケートの分析、参加者アンケートの分析、出演・登壇・参加者などへのお礼のメール、報告書の作成、etc.



<雄勝湾での漁業体験>

2015年になると、被災地の現状が変わり、復興住宅に入れる人とそうでない人がいるなど、生徒たちの手に余る問題が出てきました。なぜ自分たちは被災地を訪問するのか、ということ自体を考え、悩みながらツアーを行ないました。

その際、女川町長や地域の人たちとフューチャーセッションを行ない、生徒たちは、「復興を応援」ではなく、「新しい町づくりをしている人たちを応援したい」というように気持ちが変わりました。今後の活動を考えた時、これほどお世話になっている女川は自分たちの「地元」みたいではないか、「あの人に会いたい」「風景が好き」「ほっとする」、そう感じる場所はどこでも自分の「地元」になるのではないかと。自分たちはどこにでも、いくつでも「地元」を作れる、そんなムーブメントを起こしていきたい、そんな思いから、2015年12月、「jimotoプロジェクト」が誕生しました。

いわゆる「タニンゴト」から、自分たちは自分たちの周りのこともよく知らないのだと気づく「ジブンゴト」へと変わっていく、そのプロセスが大事なのではないかと考え、地域の魅力を知りきっかけとしての「jimotalk」、地域を実際に見に行く「jimotour」、実際の地域課題に取り組む「課題解決プログラム」という三段階の流れを

活動していると、周囲の人に励まされたり、あるいはそれでは足りないのでは、と指摘されたりもしますが、そういったことも大事です。

学校以外の人とつながり、これらのことを積み重ねていく中で、書類の書き方、話の進め方、大人とのコミュニケーションの取り方、パソコンのスキル、そして組織づくりなど、学校で学ぶこと以上のさまざまな分野の知識やスキルを身に付けることができます。

活動と思考の深まり～「タニンゴト」から「ジブンゴト」へと変化するプロセス～

そもそも「jimoto プロジェクト」の源流は、2013年に実施した「東日本大震災被災地スタディツアー」です。「被災地に行って何かお手伝いをしたい」と考える当時の生徒たちに、「行って何が出来るのか」など問いかけながら、自分たちで行先やプログラムを立てていくというボランティア部の基礎が出来ました。2013年度は「見よう・聞こう・話そう」をテーマに、2014年度は「話そう・学ぼう・踏み出そう」をテーマに、宮城県石巻市・東松島市・女川町を訪れました。

考えました。その時の考えに沿って、プロジェクトは世代を超え、後輩たちが引き継いでいます。

つながりは新たな展開を引き寄せます。今回行なう長野県上田市のスタディツアーは、去年のスタディツアーで実施した「フューチャーセッション」で出たアイデアがこの1年の間にさまざまに実現し、継続・発展したものとして計画されました。常に PDCA サイクルをまわしながら活動しています。

資金調達も含めた計画と責任

2018年に、ボランティア部の組織図を作り直しました。NPOの組織図を参考にしています。

私は、生徒たちにできるだけ自分たちで考え、行動させることを心がけています。時には「大人の本気」を見せつつ、「一緒にやる」「経験で学ばせる」「責任を取らせる」ことが大切だと思っています。

活動に必要な資金も自分たちで用意するように言っています。例えば、イベントを開催するのに会場費が二十数万円かかると言われたことがありました。この時も生徒が企業の担当者とやり取りしていましたが、生徒とは別に、先方から私に連絡があり、「何とかやらせてあげたいが、どうしましょう」と言ってくださり、ではどうしようかと考え、会場協賛の申請をすることにしました。生徒たちが書類を作って申請した結果、それまでに物販などで貯めてきた部の資金でまかなえるほどになり、支払うことができました。

イベントの収支が赤字になることもあります。自分たちで行政や地域の方と何回も打ち合わせして、練馬の町歩きとワークショップを実施したときは、参加費を取ったのですが結果として赤字になりました。赤字の部分に関して「参加費を上乗

せしましょうか」と言ってくだった方がいましたが、生徒たちには「赤字分は部の資金から補填しなさい。収支表を出して会議に諮り、合意を得なさい」と言いました。

私は「失敗しろ、挫折しろ」と言い続けています。それはまずはチャレンジして欲しいと思うからです。失敗を恐れずに一所懸命に活動し、その結果として上手くいかなくても、必ず得るものはあります。彼らに広い意味での成功体験を積んでもらい、彼らの活動の幅を広げるためにも、私自身が常につながりを求め、広げ続けていくことも心に留めています。

伴走型の支援

行政や企業・団体、社会人のプロボノチームなど、さまざまな大人と連携する中で、生徒は「行動には責任が伴う」ということを実感しています。大人のスピード感に戸惑い、自分たちのやることが遅くて迷惑をかけているのではないか、メールを書くのが苦手…、試験前は勉強に集中したいなどのプレッシャーもありますし、葛藤することもあります。しかし、そういう機会が連携の意義であり学びだと思えます。

また、連携に関しては、現在学校やNPOや行政、企業などとつながっていますが、伴走型が大事で、一方通行ではなくて互いの理解がなければいけないと思います。企業や団体が生徒たちの応援団になってくれて、卒業後もつながりが継続していけば、インターンなど次のキャリアにもつながっていくのではないかと思います。

事例発表～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

2018年3月25日東京セミナー

中学生が実践する 復興支援活動から見えるもの



福島県 いわき市立平第三中学校
かめおか ともる
教諭 亀岡 点 氏

復興支援ボランティア活動を通して 学校の教育課程の外で学ぶ機会を創出

唐木清志先生のお話 (p3～p10 参照) を伺い、とても共感するものがありました。特に「教室の中で、教科書とチョークだけを使って教えるには限界がある」こと、また「教育課程の中だけではできない」という点です。

私はこの一年間、さまざまな課題を抱える子どもたちを解決に導く必要に迫られました。そのアプローチとして、学活や道徳など、教室の中だけでは足りないのではないかと考え、復興支援ボランティア活動を学級経営に取り入れてきました。ただ、ボランティア活動は強制ではなく、生徒たちには部活動などもあり、全生徒が参加できる訳ではありません。個々の活動を学校全体に還元することも必要ではないかと考え、そのバランスを模索しています。

学校経営に必要な「モノ」「ヒト」「カネ」

「モノ」＝「ビデオカメラ」＝挑戦するきっかけ

私がこれまでやってきたことは「学級経営」ですが、やはり「経営」なので、「モノ」「ヒト」

「カネ」の3要素が必要です。

まず「モノ」です。生徒たちを社会に向けさせようとしてただ現場に連れて行っても、ぼかんとして何もできず、相手に失礼になったり、また逆に自分たちも自信を失ってしまったりします。

そこで私は、生徒にビデオカメラとマイクを持たせました。お話を伺うだけでなく、ビデオに撮ることで、それを形に残すことにしたのです。人見知りの東北の生徒でも、ビデオカメラとマイクを持つと、物怖じせず挑戦できます。大人の方も、非常に心を開いて話をして下さり、生徒たちを勇気づけることになります。



福島の食材が風評被害を受けて、つらい思いをしている方が多くいるということから、「福島は美味しい」という番組を制作したことがあります。それまでメディアの取材を一切受けたことの無かった「立子山凍み豆腐」（高野豆腐）の生産者に取材を申込みましたが、最初は断られました。けれども結果的には、わざわざ中学生が来てくれたということで受け入れて頂き、作り方の体験までさせて頂きました。



「ヒト」 = 「コーディネーター」

生徒たちがいくら「ここに行きたい」「こういう話が聞きたい」と言っても、つながりがないとどこにも行けません。そのつながりをコーディネートしてくれる存在が大事だと思います。



いわき市の海岸は「鳴き砂」が有名で、その鳴き砂を保存している「特定非営利活動法人いわき

鳴き砂を守る会」があります。こことつながることで、海岸の放射線量の調査や、外で遊ぶ機会が減った子どもたち向けに、いわき駅前に作られた大きな砂場のイベントなどに参加させてもらいました。このイベントは日曜日に開催されたものですが、普段はやんちゃな男子生徒も、子どもたちと楽しく遊びました。

いわき市内には、原発事故の影響で、周辺の市町村から約 2 万人の方々が移り住んでいます。仮設住宅はなくなりましたが、今は復興公営住宅です。

震災直後から避難して来た方々を支援している団体の方から、復興公営住宅では高齢化やコミュニケーション不足などの課題を抱えており、中学生が行くと、とても喜んでくれるという話を聞いた生徒たちは、自ら訪問を希望し、砂絵教室が実現しました。

その活動を進める中で、かつて自己表現が苦手だった生徒も自信を持って動き、それをほかの生徒もサポートするようになりました。そうしてクラスの中の人間関係も改善していきました。

このような活動は、生徒指導や進路指導にも役立ち、やはり学級経営は教室の中だけではない、と実感します。



企業との連携

実はビデオ制作は、パナソニックさんのプロダ

ラム「KWN」(p26~p27 参照)に参加して行なっています。

前任校時代、そのパナソニックさんから、味の素さんが仮設住宅にキッチンカーを持ち込み、住民と一緒に調理するという被災地支援活動をご紹介頂きました。中学生がレポーターとして一緒に参加してくれないか、とお声がけ頂き、実際に行くと、住民の方々は心を開いて温かく迎えて下さいました。

さらに、味の素さんは学校に来て下さり、運動不足で肥満になりがちな福島の子どもたちに対する健康的なメニューについてお話し頂きました。これは、子どもだけでなく、保護者にも課題を考えてもらえる企画となりました。

また同じく前任校の生徒たちとは、KWNの事業の一環で、ニューヨークのイベントにも参加しました。そこには、さまざまな国からの参加者がいて、生徒たちが「福島から来た」と言うと「大丈夫なの?」「住めるの?」と聞かれます。そのような疑問を持つ各国の人と直接話ができることで、安心してもらえますし、また生徒たちにとっても説明ができたことに喜びを感じたようです。

「カネ」の部分 人や企業・団体とのつながりでカバー

中学校では、高校受験に向けた模擬面接を行ないますが、これには地域から多くの方が来て、面接試験や講演会をして下さいます。ただ、学校側の経費としてはほぼゼロ、皆さんボランティアで来てくださいます。公立学校にはお金が無く、企業の方をお願いしたいことは、まずお金のことで

やりたいことがあっても、お金が無いからと却

下されてしまいます。それではどうしようかという時に、さまざまな人や企業、団体とつながりがあると、快く来て頂けます。

例えば、取材でのつながりを通じて、車椅子バスケットボールの日本代表の方が3名学校に来て下さり、子どもたちに体験させてくれたこともあります。



これらの活動を通して、生徒たちは自分の発言に責任を持ち、自分で考え、行動できるようになりました。

実は、今年度生徒たちが作った映像作品『ボーダーライン』は、2017年度のKWN日本で「ベストアクティブ賞」「パナソニック社員賞」を頂くことができました。ぜひ見て頂ければと思います。

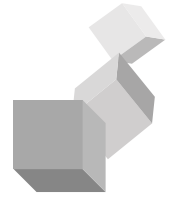


<https://www.panasonic.com/jp/corporate/kwn/video.html>

事例発表～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

2018年3月25日東京セミナー

社員と中学生が 一緒に社会課題に取り組む職場体験



学校：墨田区立両国中学校 職場体験
実施期間：2017年7月11日（火）～13日（木）
授業時間：3日間（総合的な学習の時間として）

東京都内の公立中学校ではキャリア教育の一環として、2年生が数日間、地域商店、地元産業、民間企業、公的施設などの職場で、実際の仕事を体験する「職場体験」が行なわれています。日本フィランソロピー協会では、この職場体験を「中学生が職場を知る」だけでなく、中学生と大人と一緒に社会の課題を考えて行動する機会としたいと考え、職場体験プログラムの企画をサポートしました。

体験先：NECソリューションイノベータ株式会社

テーマ：障がいがある人と働く

参加生徒数：5名

同社では、働く障がいがある社員へのインタビューや、同社が障がいがある人の暮らしをどのようにICTの技術で解決しようとしているのかを学びました。また地域の障がい者支援施設が社員食堂で物品販売を行なうイベントを手伝うことにより、障がいがある人とともに地域の中で暮らすということはどういうことか、考えました。



体験先：株式会社りそな銀行本所支店

テーマ：地域の人を「特殊詐欺」から守る

参加生徒：3名

同社では、銀行業務の学びに加えて、近年大きな被害が出ている「特殊詐欺」から高齢者を守る取り組みを、社員と一緒に考えました。金融犯罪の現状や、実際にりそな銀行の窓口で起きた事例などを学び、お客様に配布する啓発チラシを作成、店頭で積極的に声をかけ、配布しました。

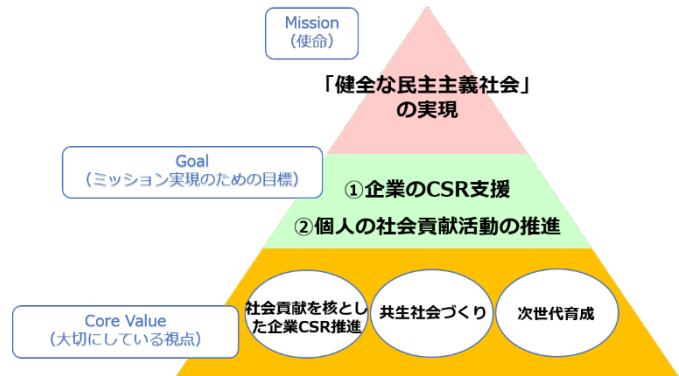


シティズンシップ教育の実践を深めるために ～日本フィランソロピー協会の事業について～

公益社団法人日本フィランソロピー協会

1. 「健全な民主主義社会の実現」をミッションとして

日本フィランソロピー協会は、「健全な民主主義社会の実現」をミッションに、障がいの有無・性別・年齢などに関係なく、全ての人がそれぞれの役割を果たし、社会を構成する一人ひとりが主体的に社会づくりに参加することが民主主義の原点と考え、個人や企業の社会貢献（フィランソロピー）活動を推進しています。



2. チャリティーチャレンジ・プログラム

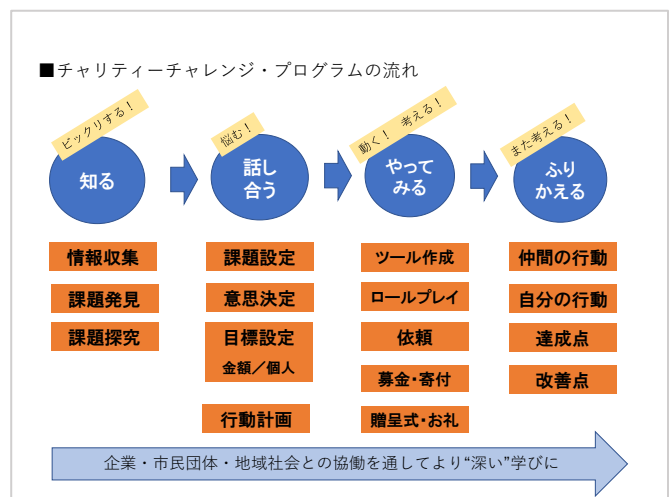
「健全な民主主義社会」の担い手育成として、日本フィランソロピー協会では青少年の募金・寄付・ボランティア活動の推進を行なっています。

その中の「チャリティーチャレンジ・プログラム」は、募金・寄付を核としたサービス・ラーニングです。

実際の社会課題や地域の「困りごと」を題材とし、その解決に役立つ「お金」の意義や、その集め方（募金）、活用方法（寄付・ボランティア活動）を考え、実践することで、課題解決に向けた創意工夫と継続に向けた意欲が向上します。

生徒たちが具体的な社会課題解決を進めるには、学校の中だけでは限界があります。現場で実際に活動している企業や市民団体、行政と連携し、行動することで、自分たちの活動に対する大人のさまざまな反応を得ることができ、自分自身のロールモデルを見つける機会となります。

また生徒たちの活動を通し、大人側の意識・行動が変わることも期待され、「地域力」の向上につながります。



3. 日本フィランソロピー協会のサポート

学校と企業、地域などが連携し、子どもたちのシティズンシップを高め、より深い学びの機会を提供するため、日本フィランソロピー協会は以下の役割を担っていきます。

ぜひ、お気軽にお問合せ下さい。

■プログラム立案

学校の目的や条件（人数・時数等）に沿って、授業や課外活動のプログラムの立案・実行をサポート。

■各種資料の提供

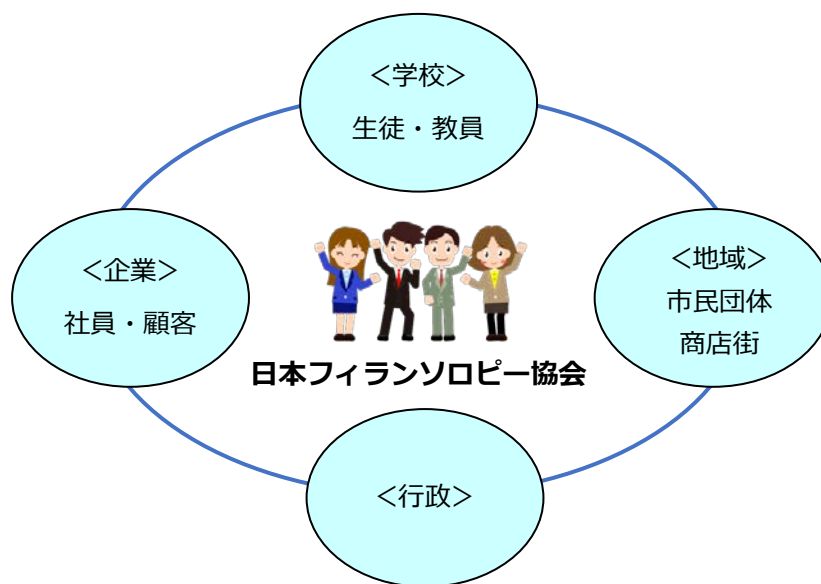
プログラムを進めるにあたって、マニュアルやその他ツールの作成のために必要な資料を提供。

■企業・関係団体との連携促進と調整

プログラムを立案・運営する上で必要な、地域の企業・団体との連携を促進するための調整をサポート。

■情報提供・情報交換の場の提供

プログラムに取り組む学校同士、また学校と企業・団体との意見交換の場や、説明会、研究会、報告会など、関係者が求める情報の提供や関係づくりの機会を提供。



【お問合せ先】公益社団法人日本フィランソロピー協会

〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 244 区

TEL 03-5205-7580 FAX 03-5205-7585 E-mail JPA-info@philanthropy.or.jp

URL <http://www.philanthropy.or.jp>